

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 井上史雄

本論文は、山形県庄内方言を中心に据えながら東北方言の歴史的変遷過程を多方面から論じ、それを通して言語変化の一般理論を目指したものである。

全体の構成は、4部、27章からなる。既発表の論文を集めたものであるが、再録に際しては、それぞれにかなり筆を入れるとともに、各章の冒頭にその論文の位置付けや研究の背景を置いて、全体として一書としてのまとまりをつけている。

第1部は「東北方言史概要」と題する東北方言の歴史の概観で、考古学・歴史学・人類学など隣接科学も参照しつつ、総合的に論じている。また、言語史についての様々な研究方法やその理論についても述べている。

第2部は「東北方言の語彙の変遷」で、語彙の変化を扱った章からなる。個々の語史の復元には、方言地図、隣接集落での住民の全数調査などに加えて、横軸に地域、縦軸に年齢を置いた「グロットグラム」(地理×年齢図)という新しい方法が用いられている。その結果、共通語化が急速に進んでいる現代においても、従来型の方言自体の変化も起こっていることが明らかになった。この現象を井上氏は「新方言」と名付けた。これは、古くから連綿と続いてきた伝統的な言語変化をさすもので、それが現在においても進行中であるという指摘は、現在の方言を対象としても過去の言語変化に繋がる研究が可能であることを示すものとして注目を浴びている。

もう1つ目を引くのは、江戸時代後期の方言集『莊内浜荻』を使った研究である。同書所収の項目について庄内全域で言語地理学的調査を行って方言地図を作成するとともに、コンピューターを使って大量のデータに多変量解析を施し、二〇〇年間の方言変化を分析した。その結果は現在の年齢差から推定した変化と矛盾せず、これにより、過去にさらに遡って方言状態を推定できることが明らかになった。これは、別章の青森県下北半島における年齢層別の地理的分布調査と集落全数調査によっても裏付けられている。

第3部は音韻・文法の変化を扱った「東北方言の音韻と文法の変遷」で、まず、現在の音韻体系の記述としては、単一の体系を立てるのではなく、伝承されている古い音韻体系と、共通語化の影響を受けた新しい体系の、複数体系の併存という考え方をとっているのが特徴である。それを承けて、その後に続く章においては、比較方法や内的再建により音韻変化の相対年代を明らかにし、東北方言の音韻史を再構成している。

第3部後半では、サ行変格活用動詞の五段化・一段化、形容詞の活用体系や過去表現の単純化、動詞活用などにおけるr音脱落の動きなど、文法に関わる諸現象を考察し、文法的変化の進行過程を実地調査によってとらえている。

第4部は「共通語化のプロセス」を扱う。共通語化は周知の現象であるが、ここでも氏は新しい見解を提示している。方言と共通語の二つの体系が接触することによって様々な中間段階が作り出されている現象もその一つであるが、もっとも注目されるのは、言語変化はSカーブを描いて進行するという理論的仮説に従って音韻変化の所要年数を推定してみせた点である。この手法により、音韻の共通語化は近代以降に進み、現在もなお進行中で、全体の完成には一〇〇年以上かかるという見通しが得られた。この傾向は、先に見た『荘内浜荻』以来の庄内方言の変化や下北方言の変化とも一致する。

方言史を再構する研究方法としては、文献を利用した「文献方言史学」、地域差を利用した「方言地理学」、他方言との比較による「比較方言学」、一つの方言の交替現象に基づく「内的再建」などが挙げられるが、本論文はこれらと並んで、年齢差に着目した社会言語学的手法を「言語年齢学」と呼んでグロットグラムなどにおいて積極的に活用した点が顕著な特徴である。これらを総合的に用いることにより、従来あまり進んでいなかった東北方言の言語史の解明を進めた功績と、地方語の個別の研究に徹することによって、言語変化一般という普遍に通じる道の開拓に成功した点は高く評価される。

「孤例」の位置付けや「Sカーブ」の理論にはなお詰めるべき点がある。また、『東北方言の変遷』というタイトルでありながら、東北方言全体を概観した章が欠落しているのも惜まれる。しかしながら、これらは本書全体の大きな価値に照らしてみれば小さな問題に過ぎない。

結論として、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。